

# 食肉検査便り

発行者：滋賀県食肉衛生検査所  
(近江八幡市長光寺町1089-10)  
TEL: 0748-37-7037 FAX: 0748-37-5854  
ホームページアドレス：  
<http://www.pref.shiga.lg.jp/e/shokuken>

◆第59号◆

発行年月日  
平成29年(2017年) 3月23日

1. BSE検査の見直しについて
2. 黒毛和種肥育牛の疾病統計
3. 食鳥監視・意見交換会
4. と畜検査でみられる牛白血病について



## 1. BSE検査の見直しについて

平成29年4月1日より、**健康牛に係わるBSE検査が廃止**されます。

なお、**特定危険部位(SRM)の除去は従来どおり**です。

### 現在

#### ◎BSE スクリーニング検査

対象：**48か月齢以上の牛すべて**  
または**神経症状等を示す牛**

#### ◎特定危険部位(SRM)の除去

全月齢：回腸遠位部、扁桃  
30か月齢以上：頭部(頬肉、舌除く)、  
脊髓、脊柱(尾椎除く)

### 今後

#### ◎BSE スクリーニング検査

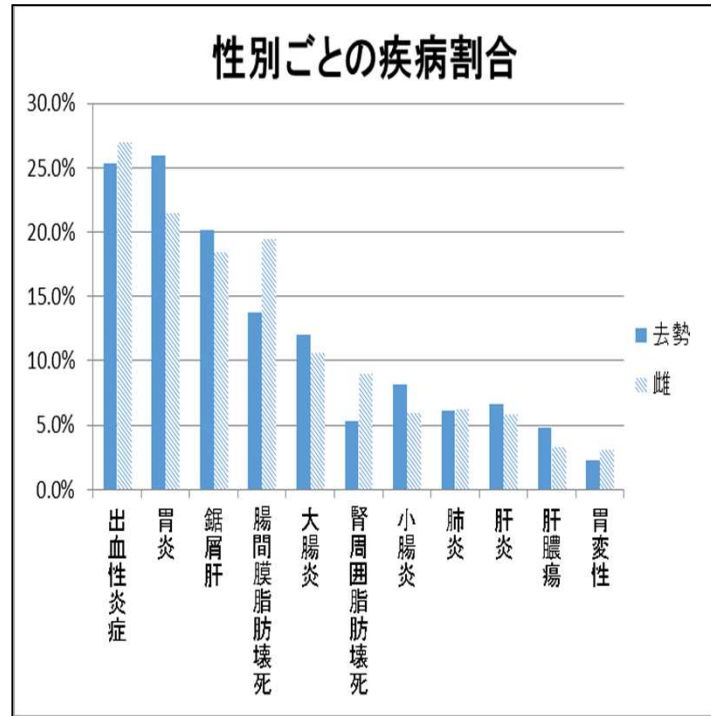
対象：病畜において、**神経症状等を示す**  
**24か月齢以上の牛のみ**

#### ◎特定危険部位(SRM)の除去

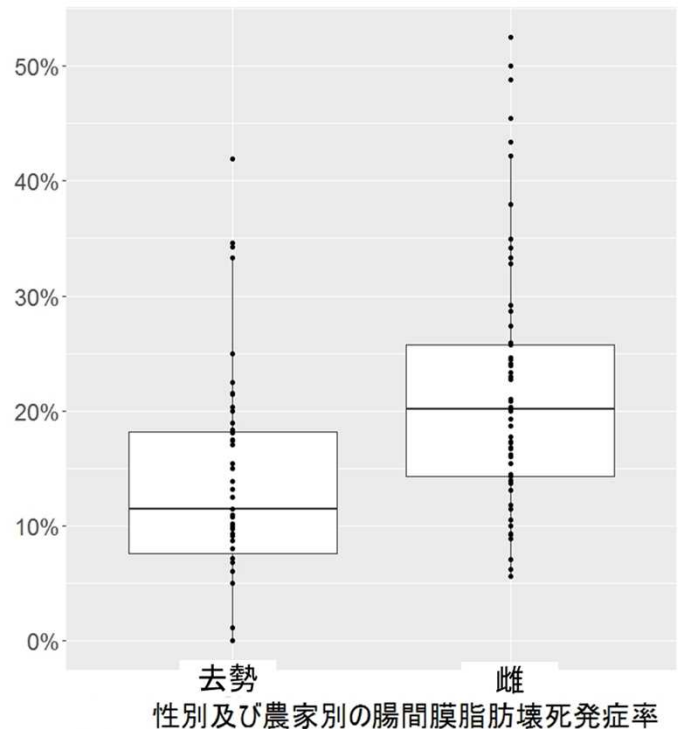
全月齢：回腸遠位部、扁桃  
30か月齢以上：頭部(頬肉、舌除く)、  
脊髓、脊柱(尾椎除く)

## 2. 黒毛和種肥育牛の疾病統計

- 2010年4月～2016年3月の黒毛和種肥育牛約3万頭の疾病データを取りまとめました。結果は、出血性炎症(アタリ)、胃炎、鋸屑肝、腸間膜脂肪壊死、大腸炎が10%以上発症していました(右表)。去勢に比べると牝では、腸間膜脂肪壊死および腎周囲脂肪壊死が多く発生していることが分かりました。



- 黒毛和種において腸管の閉塞などで問題となる腸間膜脂肪壊死ですが、平成27年では、全国で1630頭もの事故が報告されています。この疾病は、去勢に比べ牝の方が発症しやすく、また、農家によって発症率に大きな差があることが分かりました(右図)。右図の●は、各農家の平均発症率を表しており、去勢でも多い農家では40%以上である一方、少ない農家では発症がないなど、大きな差が見られました。脂肪壊死の原因は、ルーメンアシドーシスや遺伝的な要素が報告されています。



### 3. 食の安全・安心に関する啓発事業について

県内5保健所が開催した「食の安全・安心に関する意見交換会」、大津市が開催した「夏休み食品衛生親子講座」で一般消費者、学生等計98人に食肉の安全・安心に関する啓発を行いました!

#### 【内容】

と畜場における衛生確保対策や食肉、特に食鳥肉の生食による食中毒を中心にお話し、食肉の安全性および食肉の生食の危険性等について、消費者、事業者、行政(保健所および食肉衛生検査所職員)の3者による意見交換を行い、理解を深めました



### 食鳥処理施設の監視指導状況について

○今年度から当所で、滋賀県内(大津市を除く)の食鳥処理場および併設食品営業施設の監視指導業務を行います。2月末日までに31施設(全33施設)に対し計74回の監視を行い、衛生的な食鳥肉の取扱いや生食での販売を控えるよう指導を行いました。

○県内(大津市含む)の食鳥処理業者を対象に「食鳥処理衛生管理者研修会」を当所で行い、関係法令、家きんの疾病、食鳥肉に由来する食中毒の発生状況や予防等について講習を行いました。

(10月22日 研修参加者20名)

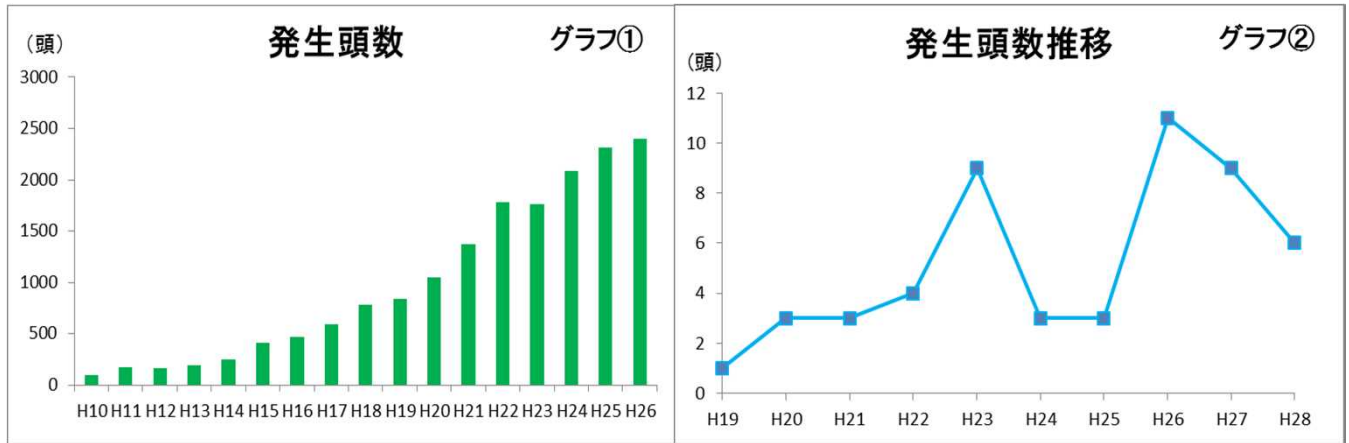


近江軍鶏

## 4. と畜検査でみられる牛白血病について

### 牛白血病とは

届出伝染病に指定されている腫瘍疾患であり、地方病型と散発型に分けられます。前者は牛白血病ウィルスが原因となりますが、後者については原因不明です。現在のところ、有効なワクチンや治療法はありません。



国内での発生頭数は年々増加しています。(グラフ①)

滋賀県食肉衛生検査所でも過去10年の発生頭数推移をみると増加傾向にあります。(グラフ②)

牛白血病は、農場で診断された場合のみ共済金支払対象とされていましたが、平成27年5月1日以降に出荷して、と畜場で牛白血病と診断され全部廃棄となった場合も、家畜共済(牛)の加入者については共済金支払対象となりました。(牛白血病感染拡大防止措置の不備や農業共済組合への通知遅延等で免責されます。詳しくは、農業共済組合本所へお問い合わせ下さい。)

### 牛白血病を減らすためには

#### 牛白血病に関する衛生対策ガイドライン(一部抜粋)

- ①分娩後の消毒、子牛の早期分離・検査、初乳の取扱い(60°C・30分間加温など)
- ②吸血昆虫対策
- ③除角等の出血を伴う処置への対応
- ④感染牛の計画的な更新
- ⑤農場における牛の配置(分離飼育)など

特に重要との報告あり